

II-338

地域、季節、時刻の相違による海岸利用状況の変化

建設省土木研究所 正会員 宇多高明 建設省土木研究所 正会員 浅 亨(フジタ工業(株))
建設省土木研究所 正会員 小 保 篤 茨城県土木試験所 正会員 羽成英臣

1. まえがき

日本列島は南北に細長く、また気候の季節変化が大きいために、海岸利用に関しても地域性や気候変化の影響が大きく、様々な特性が見られる。それにもかかわらず、海岸の利用状況に関する具体的な資料は乏しいのが現状である。そこで、本研究では海岸利用状況の基礎資料を得るために、全国10海岸を対象とした現地調査を実施し、地域、季節、時刻の相違による海岸利用状況の変化について検討した。

2. 調査方法

本調査では沿岸方向の一定区間(30~360m)内において、行動形態毎の利用者数を直接計測することにより利用実態を調べた。調査区間には対象海岸で利用の最も盛んな場所を選んだ。また、調査区間は海域、汀線域、陸域に細分した。調査対象には地域、海岸地形を考慮して10海岸を選択し(表-1)、夏、秋、冬のできるだけ天気の良い休日の朝(8~9時)、昼(13~14時)、夕(16~18時)に調査を実施した。海水浴は海岸の代表的な利用形態であるが、海水浴を目的とする利用者は様々な行動形態をとる。すなわち、海水浴は種々の利用形態の総称と言える。したがって、海水浴を目的としても実はその行動形態は様々となるので、本調査では個々の行動形態を細かに分類した(表-2)。この場合、主に海岸の雰囲気を利用する行動形態を散策として整理した。

表-1 調査対象の海岸名と地形区分

調査対象海岸	海岸地形	調査対象海岸	海岸地形
五浦海岸(茨城県)	崖	徳光海岸(石川県)	砂浜
阿字ヶ浦海岸(茨城県)	砂浜	東播海岸(兵庫県)	砂浜
大洗海岸(茨城県)	磯と砂浜	万座ビーチ(沖縄県)	砂浜
大洗サンビーチ(茨城県)	砂浜	残波・真栄田岬(沖縄県)	崖
片瀬江の島海岸(神奈川県)	砂浜	北谷サンセットビーチ(沖縄県)	砂浜

表-2 利用形態

利用形態	行動形態
海域利用	水遊び、水泳
汀線域利用	砂遊び・水遊び(汀線)、潮干狩り、磯遊び
陸域利用	砂遊び(陸域)、飲食(浜茶屋、バーベキュー)、日光浴、砂風呂、スイカ割り、キャンプ、ボール遊び、フリスビー
散策	デート、散歩、休息、貝殻拾い、サイクリング

3. 調査結果

(1) 地域、季節差による海岸利用状況の変化

海水浴のために海域を利用する人数、海水浴の入込者の総数、海水浴と散策を行っている人数の合計と、海岸への全入込者数との比(利用割合)を図-1に示す。砂浜海岸では、海水浴(△印)は夏に多いが、秋、冬には散策が多くなる。また、夏にも散策の利用者が多い海岸もある。磯海岸や崖海岸では年間を通じて散策が多い。これらのことから、散策は海岸の代表的な利用形態であることが分かる。海域利用は、大洗サンビーチで多いが、その他の場合海水浴入込者数全体の半分以下である。大洗サンビーチは、防波堤の背後にあり遠浅で比較的静穏なことが海域利用の多い原因と推定される。次に、最近盛んになっているヨット、サフィ、ウインド・サフィ、ジェットスキー、モーターボート、水上スキー、パレ・リソ、ダイビング、オフロード・モーターサイクル、ビーチャレの各利用形態をマリンスポーツとして一括し、調査日における利用形態の総数とマリンスポーツの利用形態数の集計結果を図-2に示す。五浦海岸、万座ビーチは夏のみに利用形態数が多く、秋、冬には少ない。実際、これらの海岸の秋、冬の利用はほとんど散策になっている(

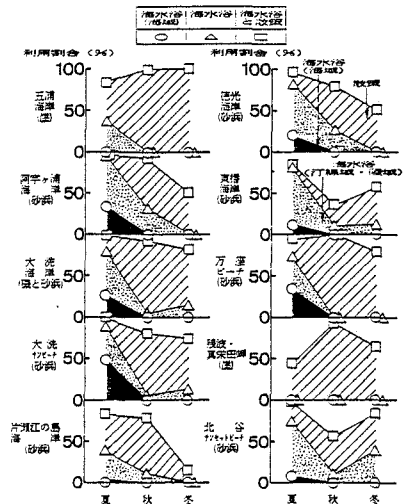


図-1 季節による利用状況の変化

図-1参照)。これは、これらの海岸が宿泊客を利用者の中心とする観光地のため、地域住民が主として利用する海岸に比べて利用目的が限られたためと考えられる。徳光海岸も同様の傾向を示す。しかし、この場合は秋、冬の日本海沿岸の厳しい気象条件が原因と考えられる。一方、阿字ヶ浦海岸、大洗サンビーチ、東播海岸ではわずかながら夏から冬へとマリンスポーツの利用形態数が増えている。このことは、夏の海水浴に

よる混雑のためその他の海岸利用が難しく、砂浜、海面共に混雑しなくなる秋、冬にマリンスポーツが行われることによると考えられる。また、全体の形態数は、大洗サンビーチ、片瀬江の島海岸(天気、波浪条件が悪い冬を除く)、東播海岸が多い。これらの海岸の共通点は、海岸が構造物、島の背後あるいは内湾にあり、波浪条件が比較的穏やかなことである。さらに、3 海岸共に近接した住宅地があり、そこからのアクセスが良い点が挙げられる。

(2)時刻差による海岸利用状況の変化

海岸利用が最も盛んな夏を対象として、3つの砂浜海岸(阿字ヶ浦海岸、徳光海岸、万座ビーチ)の各調査時刻の利用状況を入込客数の百分率として整理した(図-3)。茨城県の調査(茨城県, 1987)によれば、阿字ヶ浦海岸は比較的遠距離からの入込客が多い。ここでは、8時と14時に95%以上を占めていた海水浴の利用割合が、18時には約25%となった。一方、8時と14時には4%以下であった散策が18時には25%に増加した。これは比較的遠距離からの利用者の多い当海岸では、海水浴を早めに終わらせる傾向にあるためと考えられる。また、18時にはサーフィンを行う人が45%以上を占め、サーフィンを行う人が昼の海域利用者による混雑を避けたことを示す。徳光海岸は松任市にあり、金沢市からも近く、都市部からのアクセスが非常に良い海水浴場である。ここでは、18時に約70%近くの海水浴の利用があり、22%の海域利用が見られた。このことは、都市部からのアクセスの良い海岸では朝から夕刻まで海水浴が可能なことを示すと考えられる。したがって、阿字ヶ浦海岸を住居遠隔型の利用状況とすれば、徳光海岸は住居近接型とすることができる。利用状況の季節変化やアクセスの類似性から見て東播海岸、大洗サンビーチも住居近接型と考えられる。海岸背後にリゾートホテルを有する万座ビーチは徳光海岸と同様に海水浴が朝から夕刻まで見られた。また、散策の利用割合が8時に64%と、阿字ヶ浦海岸や徳光海岸に比べ非常に高い。そして、18時には海域利用が38%を占めている。同日の北谷サンセットビーチ(市民利用を目的とした人工海浜)では18時の海域利用は14%を占めるのみである。すなわち、沖縄では日没が遅く気温が高いことだけではなく、宿泊施設と海岸が近接していることが、朝早くからの散策、夕刻までの海域利用を容易にしていることを示している。これは、滞在型の観光地にある海岸の特徴と考えられ、滞在観光型の利用状況と呼ぶことができる。五浦海岸もこの型の利用状況を示す。

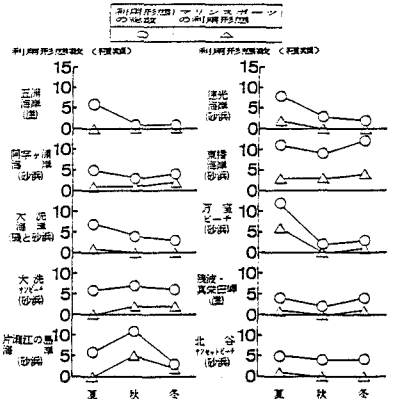


図-2 利用形態の種類およびマリンスポーツの形態数の季節変化

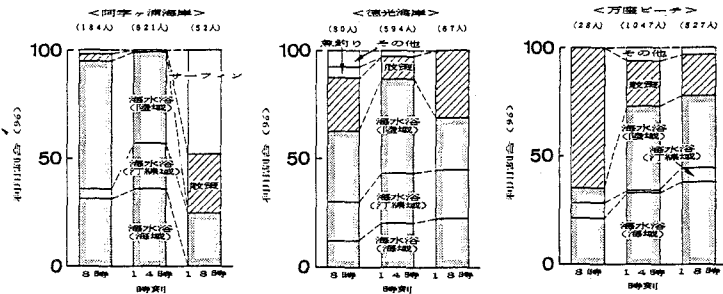


図-3 時刻による利用状況の変化(夏)

4. 結論

①従来、海浜利用は海水浴が主と言われていたが、本研究によれば散策も海岸の代表的な利用形態であることが示された。 ②砂浜海岸の海水浴場では、夏の混雑時の利用は海水浴や散策に限られ、利用形態は秋と冬に多様化する傾向がみられた。ただし、海象条件が秋、冬に悪化する日本海沿岸ではこの傾向は当てはまらない。 ③海岸の利用状況は、季節および時刻の変化から滞在観光型、住居近接型、住居遠隔型の3つに分類された。滞在観光型および住居近接型の海岸では、夏季には朝から夕刻まで散策および海水浴の利用が可能である。しかし、観光地型では秋、冬の利用形態が画一化する傾向がある。また、住居遠隔型の海岸では夕刻の海水浴客数が少なくなる傾向にある。

参考文献

茨城県(1987): 茨城の観光レクリエーション現況, 43p.